

「昔」と「今」の写真が語る物語



1954

札幌市公文書館所蔵



2020

まちの今昔物語

昔も今も、人気者
円山動物園は、1951年のこの日に開園した北海道初の動物園。当時、展示していた動物はヒグマのつがいとエゾシカ、オオワシの3種4点のみでした。1953年、アジアゾウの花子が来園し、たちまち人気者となり、動物園のシンボルに。古い写真は、来園した翌年の花子を写したもので、柵もなく、子どもたちが周りを取り囲む状況は、今では考えられませんよね。新しい写真は、2019年にオープンしたゾウ舎での1カット。屋内外にプールを設置した国内最大級のゾウ舎に、ミャンマーからやってきた4頭のアジアゾウが暮らしています。かつてのゾウ舎の床はコンクリートでしたが、現在はより自然に近い環境にしよと砂を取り入れ、ゾウが生き生きと過ごせる工夫が施されています。のびのび暮らすゾウたちが、子どもたちの人気者であることは、昔も今も変わりません。

まち・アーカイブ

No.005

銭湯



01-02:大川湯。1931(昭和6)年の開業時。1992年10月4日廃業。/03:柳湯。1930(昭和5)年の開業時。2002年12月15日廃業。/04:北魁湯(南2西1)。「札幌繁栄図録」1887(明治20)年刊。/05:さかえ湯(北10西21)。1996年まで石炭が燃料だった。

銭湯の記憶は「大川湯」(北6西20)から始まる。1956(昭和31)年の秋に移り住んだ場所に最も近い銭湯だった。大川湯は1931(昭和6)年の開業だが、その当時の写真が残っている。一枚は紋幕を張った建物の前に当主らが並ぶもので、もう一枚は、浴槽に入れた草津温泉の湯の花の幟や開店の告知を手にしたチンドン屋さんが残っている。

その前年に開店した「柳湯」(南6西5)の写真もある。玄関わきの大きな立て看板には「来たる十日開業」と書かれ、その横に開店2日間は「キャラメル進呈」の文字。年代を考えると、札幌の古谷製菓が1925(大正14)年に発売した「フルヤミルクキャラメル」の可能性が高い。どの写真も当時の慣習を伝える貴重な記録だ。

札幌の銭湯第1号は、1870(明治3)年に小川万次郎が南1西1で開いた湯屋だった。建物の様子がわかるのは、1887(明治20)年刊行の『札幌繁栄図録』に掲載された「北魁湯」(南2西1)で、高々と掲げられた“ゆ”の旗は営業中を知らせるサインだろうか。

銭湯は1950年代のはじめ、現在の中央区の範囲に70軒ほどあった。だが現在浴場組合に加入するのは13軒。激減したが、それでも他区に比べると抜きん出ている。地域の交流の場、身近なレジャー空間。銭湯の位置づけは時代により変化するが、北海道胆振東部地震などの災害時には、重要なインフラとして注目された。銭湯はじつは、安心安全のまちづくりにかかせない“まちのオアシス”なのだ。

まち文化研究所 塚田敏信

札幌鐵路高校教諭等を経て現在華女子大学・札幌大谷大学非常勤講師。「まち文化研究所」主宰および銭湯倶楽部代表として各地でまち文化講座を開催。現在、朝日新聞北海道版に「まち歩きのスヌメ」を連載中。まち文化研究所 Facebookページ <https://www.facebook.com/matibunka>